

朝を
ひらく

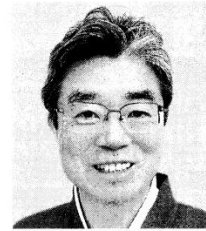
何かものごとが起こったとき、私たちはなぜそうなったのか、原因を見つけようとする。因果関係さえ見つければ、その現象をコントロールできると思うからである。ただこの効率的な考え方には落とし穴が潜む。

「永田さん、今日はどうされましたか」「はい、せきが長引いている、それから、耳の下が腫れていてネットで調べてみると……」と続けようとする私。ドクターは手で話を遮ってコンピュータのキーボードを打つ。私の話よりも、せきや腫れの症状と原因を聞き出そうとする。

物語に寄り添う

る。

永田 円了
真国寺住職



話というのは、長引くせきが心配で、レンコンを搾った汁を飲んだり、耳の下部分の腫れを自力でネット検索、どうもおたふく風邪の可能性あり、近くの耳鼻科を受診、抗菌剤を処方される、など二連の出来事を語ろうとしたのであった。

自分のペースで問診を続け、コンピュータ画面とにらめっこするドクター。私のコトバは行き場所を失った。語られなかった物語は、私の体内で噴火前のマグマのごとくドロドロと渦巻いた。

曇り空から雨に変わり、墓参者が途絶えた週末のある日、いかにも不機嫌そうな男性がお寺の呼び鈴を押した。墓地の問題で数年来クレームをつけ続けている方だった。

「どうぞお入りください」。玄関横の6畳間でその男性と私は対面した。かなり怒っている。目が私に攻撃をかけているのが分かる。「あの問題は怎么样了。墓地の問題と管理費のこと。意見が食い違ったまま今に至っていた。私は腰を据え、積極的な傾聴に徹した。30分ほど怒りの言葉が続く。積みも積もった。

感情の固まり溶ける

た感情の固まりが、私の沈黙の空間を占領した。

ものごとを因果的に捉えていた以前の自分、今回は徹底してその方の物語に寄り添った。私の中の固い何かが溶け始めた。そのとき不思議なことが起こった。感情むき出しの思いを、遮られることなく吐露した彼の表情に変化が見えた。お互い60代の後半を生き、年金生活の話に至って言葉が和らぐ。目になみだがにじむ。「これだけのお墓の管理、お寺もたいへんですね」。玄関で別れを告げたとき、2人は別人になっていた。

先日Ahaーエンパワーメント講座でこの話をしたとき、参加者のお一人が、物語に寄り添う医師の話をされた。その医院の名は「ものがたり診療所」(砺波市)。何か心が温かくな